

王國林 著

谷川道雄 監訳 中田和宏・田村俊郎 訳

土地を奪われゆく農民たち

——中国農村における官民の闘い

〈河合文化教育研究所、二〇一〇年二月、五九二頁〉

多数の農民が自分の農地を収用から守ろうと監視するなか、官僚に雇われた他所の農民工が田畑を一気に整地する側に立つという、弱者同士が身を割かれるような事件の数々を本書は具体的に挙げていく。

農村の都市化政策や企業による土地支配が進められる近郊農村では、権力による農地の農民からの収用が増えている。本書が焦点を当てているのは、その陰で、腐敗官僚と村の役人が弱い立場の農民を騙し法外な利益を得、それを一族郎党に配るといふ、身勝手な不正な行為がまかり通っているという事実についてだ。失地という農業問題と不正という社会問題が同時並行し



て、しかも結び付き合って進行する過程で悲惨な状況についてである。

王國林はこれまでも農地収用や失地農民の実態調査に取り組み、問題点や対応策を精力的に公表してきた。その活動の一環として、愛用の古い自転車に乗り、権力によって合法・非合法に農地を奪われた農民を見かけては声をかけ、話を訊き、農民の話す言葉に共鳴し、義憤にかられながらまとめたのが本書である。

しかも事実や状況を指摘するだけでなく、その解決のための具体的な対策をも提言している点は、『中国農民調査』（陳桂林・春桃）に勝るとも劣らない非常に優れた本書の貢献である。

その舞台となったのは不動産開発ブームや都市化の進展により土地需要が旺盛な浙江省臨安市（上海から西南へ二六〇キロメートル、人口五三万のうち農業人口四二万人）の農村地帯である。二〇〇三年一〇月から二〇〇五年一二月までの二年と二か月間行った第一級の第一次調査記録であり、大抵な本ではあるが飾り気のない表現は読む者の目を釘づけにする。

多少専門的な語句や中国農村をめぐる政治経済史などの理解を助けているのが、監訳者谷川道雄氏の文頭の解説と訳注である。（高橋五郎）